

5. 告知・インフォームドコンセント・セカンドオピニオン

5-1-1-1

告知の仕方や配慮に関する不満

- 告知に関する話し方、タイミング等の配慮が全くなく、あまりにも事務的すぎて我が耳を疑った。
- 告知の時、思いやりや希望をもてないようなひどい言い方をされて、鬱になりなかなか立ち直れなかった。
- 突然告知されて、心の準備ができていなかった。
- 医師より触診の直後に、がんであること、全摘手術が必要なことを冷淡に言われた。また、プライバシーも守られないまま診察室で告知され、十分な説明も受けられなかった。
- 告知はもちろん、飲んでいる薬の名前、点滴で入れる薬の名前、病気の状態も教えてもらえず、相当落ち込んだ。
- 手術前日に主治医より直接がん告知を受け、ひどく落ち込んだ。
- 再検査で医師にいと簡単にがんと言われとてもショックだった。
- 平気な顔で簡単に口に出す医師にもびっくりした。

告知のショック

現在では、がんの告知を患者さん本人にする病院が増えてきました。これにはいろいろな理由があります。

1つには、本人への告知を希望する人が日本でも増えているということです。自分の病気なのだから自分自身の問題として受けとめたいということだと思います。

最善の治療を行っていくためには患者さんと医療者の間で情報を共有し、コミュニケーションをとり、協力して治療にあたるのが大切です。そこで、自分の病気の状態、治療の具体的内容、なぜその治療が必要

なのかを理解することが協力して治療にあたる第一歩と言えるでしょう。

本人への告知

がんの告知後は強いショックを受け、頭が真っ白になり、医師が何を言ったか全く覚えていないとか、やはり聞きたくなかったとか、こころは大きく動揺します。けれども、こういったショックや動揺は、時間をかけて少しずつやわらいでいきます。

また、病気の状況や治療について知っていくことで、未知のものへの不安は徐々に少なくなっていくます。

説明を受ける患者さんにご家族の心構え

診断の結果を聞く時には、患者さんもお家族もとても緊張しています。特に、その前にがんの疑いがあるという話を聞いていると、さらにその不安と緊張は大きいと思います。

ここでは、説明を受ける患者さんの側がどうしたら良いかについて、いくつかお話ししたいと思います。



説明を受ける 患者さん ご家族の心構え

1. 医師からの説明を受ける時は、家族や親しい人に同席してもらいましょう

これは、心強さという面もありますが、医師の前ではほとんどの方が緊張します。特に診断結果や治療について聞く時は、内容によっては激しいショックや動揺が起こります。このような時に、医師の説明のすべてを理解するというのは難しいものです。

また、説明でよくわからないことがあってもそのまま聞き流したり、説明が音としては耳に入ってくるのに後で思い返すと全く内容を覚えていないということもあります。

2. メモをとるようにしましょう

医師の説明を聞く時には、メモを用意し、重要だと思ったことなどをメモしましょう。

説明を聞きながらメモをとるのは自信がないということであれば、医師に申し出て、説明を録音しても良いでしょう。ただし、内緒で録音をするというのは、礼儀に反し、その医師との関係を損ねる原因にもなります。

録音する場合は、必ず医師に断ってからにしましょう。

3. わからない内容や言葉があれば、話の途中でも確認しましょう

医師はなるべく患者さんにわかりやすい言葉を用いるつもりではいるのですが、無意識に専門用語を使用していることがあります。わからない言葉や内容があったら、医師の説明の途中でもどういう意味か聞きましょう。

4. 気持ちが落ち着いてから、同席した方とわからなかったことを確認しましょう

たとえこころの準備をしても、その場では緊張と動揺で質問する余裕はないかもしれません。

その場合は、自宅に戻ってもう一度同席した方と話をしながら、わからなかったことを確認し、次回の外来の時にでも確認しましょう。ショックや動揺が強い場合は少し気持ちが落ち着いてからでもかまいません。

5-1-2-1

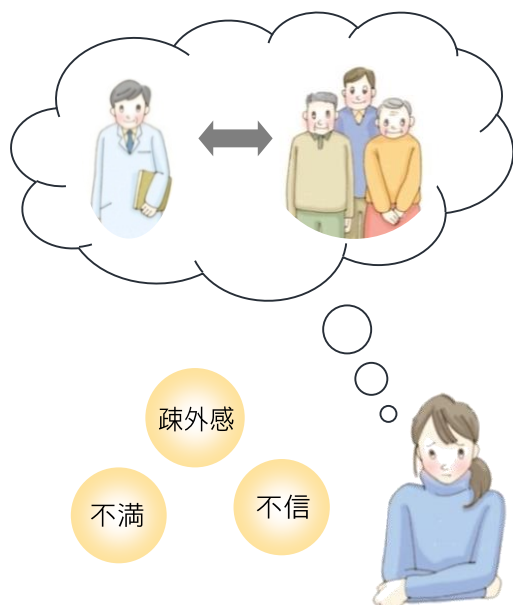
本人に正式な告知がなかったことによる不信感

- 主治医との信頼関係も疑問で、もう少し話のできる機会がほしかったと思う。自分の体のことなので、家族ではなく自分に話してほしかった。

自分の気持ちを伝える

患者さんであるあなたは日頃から担当医とのコミュニケーションの中で、病気や治療に関する説明が十分ではないと感じていたのかもしれませんが。その上、自分ではなく家族に、自分が聞いている以上の、あるいは自分が知らない内容の説明があったことを知ってしまい、そのことがこころの隅にひっかかっているのではないのでしょうか。ひっかかりを残したままでは、担当医ともご家族とも、どこかぎくしゃくした感じを残してしまうことになります。

今後のことを考えると、どこかで、このひっかかりを取り除くことが大切だと思います。



担当医に対する働きかけ

『主治医との信頼関係が疑問』と書かれていますが、もしかしたら、信頼関係を損なうような出来事と感じていることは、ちょっとした気持ちの行き違いだったり、お互いの言葉足らずが原因なのかもしれません。

担当医には、あなたが思っていることを率直に尋ねてみましょう。また、「気遣ってくれた気持ちは嬉しい。でも自分の体のことから自分で知っておきたい。病状や治療についての説明は、自分と家族が一緒に席で話してほしい。家族にも、自分の気持ちをきちんと伝えます。」と伝えてみましょう。

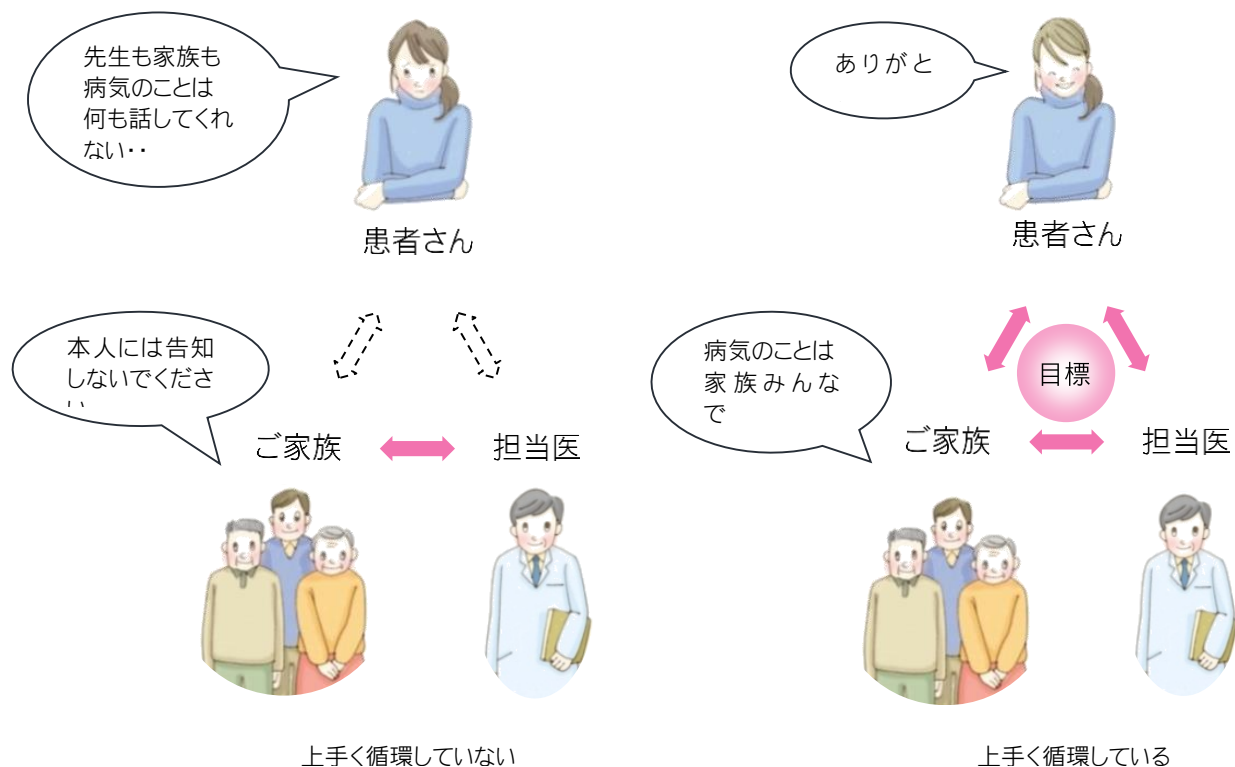
思いを素直に口に出すことは、誤解を解いたり、相手との関係をより良い方向にもっていくための大切な第一歩です。その際、今まで抱えていた相手に対するマイナスの感情を、そのまま言葉にしてしまうと、相手も感情的に反応してしまったり、自己防衛する対応をしてしまいます。伝える時には、たとえマイナスな感情を抱いていたとしても、まず今の自分の意思を感情的にならずにきちんと伝えましょう。

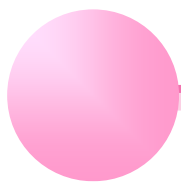
家族に対する働きかけ

ご家族に対しても、同様です。もしかしたら、ご家族が、担当医に本人への告知をしないでほしいとお願いしたのかもしれませんが、けれども、家族内に内緒事をつくると、お互いのコミュニケーションをぎこちなくさせてしまう結果になってしまいます。患者さんにとって本当の気持ちを、家族内で口にできなくなり、お互いがつらくなってしまいます。

ご家族に対しても、「気遣ってくれた気持ちは嬉しいけれど、自分の体のことだから自分で知っておきたい。先生の話は、一緒に聞いてみんなと考えていきたい。」と素直にお話してみましよう。

できれば、別々に説明を受けるよりは、ご家族と一緒に聞いた方が、お互いの理解を確かめ合えたり、つらさを分かち合うことができます。





5-2-1-1

医師の説明不足

- 診察時間も短く、がんについて十分な説明がなされず悩んだ。
- 患者は何もわからないので、もっと納得のいくようなケアと説明がほしかった。
- 治療方法についてもっとじっくり主治医の先生と話し合いたかった。
- 浮腫が起こるかもしれないということを知らなかった。
予防方法があったのなら、教えてほしかった。
- 全摘の選択肢しかないとの医師の説明だった。
医師のフォローはなかったため、不信感をもったまま治療を受けた。
- 担当医が検査データを全て教えてくれず、あまり説明もなく不安である。
- これからの通院治療についての説明を受けたが、実際は治療内容に変化があってびっくりした。
- 聞いていない副作用が出たので、大丈夫なのかと不安になった。
- 手術の際、不安なことがあったので聞いてみたが、納得のいく説明はなかった。
抗がん剤についても十分な説明をしてくれなかった。
- 詳しい説明やフォローもなく、前向きに考えることができなかった。

限られた診察時間を上手に使う工夫

外来の診察時間そのものを延ばすことは、なかなか難しいというのが現実ですが、限られた診察時間を上手に使うことで担当医とコミュニケーションをとることは可能です。

まずできることは、担当医に伝えたい事柄をメモにまとめることです。伝えたいことはたくさんあっても、いざ担当医の前に座ると、うまく表現できなかったり、伝え

るタイミングを逃したりすることがあります。

メモは、できるだけ簡潔に、箇条書きの形式でまとめると良いでしょう。作ったメモは、診察の前や診察中に自分で確認するほか、担当医に直接渡すこともできます。メモを作ることは、自分の頭の中を整理するのに役立ちます。また、同じことを何度も聞き直すことなく済むように、メモを取る準備をしておきましょう。

説明を聞きながらメモをとるのは自信がないということであれば、担当医に申し出て、説明を録音しても良いでしょう。ただし、内緒で録音をするというのは、礼儀に反し、担当医との関係を損ねる原因にもなりかねません。録音する場合は、必ず医師に断ってからにしましょう。

また、診察を受ける時には、できるだけご家族や親しい方に同席してもらいましょう。一緒に話を聞いてくれる人がいるのは心強いですし、自分で気づかなかった点をその場で質問してもらったり、話の内容を後で確認し合ったりできます。

以上に加えて、わからない点や、疑問に感じた点については、担当医が説明するのを待つのではなく、自分の方から積極的に聞いてみる気持ちをもつことも大切です。患者さんの質問に答えることは、担当医の大切な仕事の一部です。遠慮しないで、不明な点や疑問点については、その都度きちんと確認するようにしましょう。

治療の選択・決定について

担当医から、いくつかの治療法が提示され、その中からどれにするか決めるように言われたり、1つの治療法の説明を受け、それ以外に治療はないのか、その治療で良いのか迷うことがあります。

患者さんの中には、「素人だから、決められない」、「先生にお任せする」という方もいらっしゃいますが、自分自身の身体に関わる大切なことです。わからない点、疑問点を担当医に確認し、どういう治療か理解した上で、最終的には自分自身が納得して選択することが大切です。

治療を決める時、担当医は患者さんのがんの状態、全身状態（心臓や肺、腎臓などの機能、がん以外の疾患の有無など）から、どの治療がその患者さんに適応しているかを検討して、患者さんに説明します。

また、がんに対しての効果が、ほぼ同じで、いくつかの治療法がある時には、それぞれの治療法の利点・欠点について説明すると思います。

治療を決める時に悩んでしまうようであれば、ご家族と相談されると良いと思います。

説明をしてそれで終わりということではありません

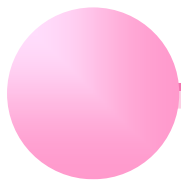
インフォームドコンセント時には、現在の病状、考えられる治療法、治療の目的、治療の効果、治療の危険性や合併症、副作用、治療のスケジュールなどについて説明があります。たとえば、副作用については、出現する可能性が高い副作用や特に注意を要する副作用などを中心とした内容の話があると思います。

薬の本などをみると、抗がん剤に限らず、1つの薬に対して副作用がたくさん並んでいると思います。ただ、これらの副作用の中には、本当にごくわずかの確率でしか出現しないものも記載されています。

一方で、治療前の説明の時は、患者さんが現在の状況や治療の全体像を理解して、自分はどうしたいのか、判断し決定できるように、多くの情報をわかりやすく伝える必要があります。こういった状況も関係して、担当医は、患者さんに必ず理解してほしい主な副作用、特に注意を要する副作用を中心に説明したと考えられます。説明をしてそれで終わりということではなく、担当医は、治療中も診察や検査を通して、患者さんの状態を見守っています。何か今までにない症状が出たり、わからないことがあればその都度、担当医に伝えて確認しましょう。あなた自身が積極的に治療に参加していくことが大切です。

本を読んで
わからなかった
ことを先生に
聞いてみよう





5-2-1-2

医師の説明が理解できない

- 病気の程度、回復の見込み、後遺症などがよく理解できず不安だった。
- 定期検診の結果説明を「はい、大丈夫ですよ」だけでなく、わかるようにしてほしい。
- 診断、検査結果、現状をもっとわかりやすく説明してほしい。
- 乳房を残せるという医師の説明がわかりにくかったので全摘してしまい、後悔している。
- 手術についての説明はあったが、家族共に専門用語での説明は難しく質問もできなかった。

何を知りたくて、どこが分からないのか

わからないことはその場ですぐに医師に確認するようにしましょう。

ただ、その時は気にならず、後から疑問が出てくることもあります。どこが分からないのか、何について詳しく知りたいのかを整理して、次の外来時に確認しましょう。

質問の仕方は、自分のわからない内容、知りたい内容によって何通りもあります。

例えば「大丈夫という答えではよくわからないのですが、検査値は悪くなっていないでしょうか」と医師に質問して検査値を教えてもらったとします。けれども、その値の正常範囲や前回の値を知らなければ、問題はないのか、変化はないのかわかりません。もし、値が高い、あるいは低いなら、それは、体のどういうことを示しているのかを知る必要があります。

自分は何を知りたくて、どこが分からないのかということを考えて、わからないことは理解できるまで繰り返し質問してみましょう。

治療に対して不安があれば納得・理解のために行動する

治療法や治療に伴うつらさなどへの不安や悩みがある場合、その根底には治療への理解が不十分であったり、未知の事柄への漠然とした不安があったりします。

そこで、納得いくまで担当医にわからない点を確認したり、がんや治療法について書かれた本を読んだり、インターネットで調べたりしてみましょう。治療法については、期待できる効果、副作用、起こりうる合併症、他の治療法と比べての利点や欠点をまずよく理解することが大切です。

できることから
始めてみましょう



1. 『不安や不信』につながっている原因をご自分の中で整理してみましょう

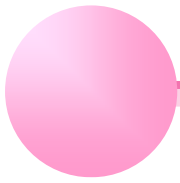
- ① まず、あなたが今不安に感じていること、疑問に思っていることをノートなどに書き出します。
- ② 次に、書き終わったら読み直し、最終的に箇条書き^{かじょうが}にしてみます。「先生ともっと話したい」、「忙しそうで話しかけられない」というのではなく、具体的に整理することが大切です。

- 「〇〇の検査結果が知りたい」
- 「〇〇という症状がどうして起こっているのか知りたい」
- 「〇〇をどう対処したらよいか知りたい」

2. 疑問、不明なことをそのままにしておかない

疑問や不明なことをそのままにしておいてはいけません。そのままにしておくと、少しずつコミュニケーションのずれが積み重なり、不信感につながります。

医師は説明したつもり、患者さんはわかったつもりでは、信頼関係を築くのは難しいでしょう。



5-2-1-3

医師の説明に納得できない

- 大きな腫瘍を見逃され理由を聞いたところ、医師は「がんにもキャラクターがいろいろある」と答えた。見逃すなんて考えられないと悩んだ。
- 「CT 検査の機械が変わって引っかかる人が増えた」と説明されたが、患者側はどう受け取っているかわからない。
- きちんと説明を聞き納得したいのに、医師に通じなかった。
- 手術前日に先生から聞いた手術方法の話と、術後の傷の状態が違っていてつらかった。
- 自分でどんな手術になるのか情報を集めたので、病院で「入院して手術」と言われたことに納得できなかった。
- 子どもが産めるのかどうか、何回か主治医に聞いてみたけど、聞くたびに答えが違うことに悩む。
- 数か所の病院を受診したが、納得できる治療法を提示する医師は少なかった。決定は患者がすることで、医師は情報を提供することを理解してほしい。

わからないことや不安なことは医師に確認する

わからないことや不安なことがある時には、医師とよく話をしてみましょう。

あなたが既にがんの治療を受けている時には、担当医と話をします。がんかどうかまだはっきりせず、検査を受けている段階であれば、検査の結果を説明してくれた医師に質問してみましょう。

診察室では、わからないことや不安なことがある時には、医師が説明するのを待つのではなく、自分の方から積極的に質問するように心がけてください。

患者さんの質問に答えることは、医師の大切な仕事の一つです。遠慮しないで、不明な点や疑問点については、その都度きちんと確認するようにしましょう。

納得して治療を受ける

治療選択の時、担当医は医学的にみて最も患者さんに適していると思われる治療を中心に説明を行います。

最終的な判断をするには、患者さんの価値観や考え方が大切になりますが、これらは主観的なものです。

治療選択をするためには、考える材料としての情報が必要になります。そこで客観的な指標である、生存期間、ある程度以上のがんの縮小効果がみられる割合、生活の質 (QOL) などをもとにして説明があります。

治療の効果、治療の危険性(合併症や副作用など)、治療のスケジュール、費用など、いろいろな観点から考え、最終的に、患者さんが納得して治療を受けることが大切です。

複数の検査結果を総合的に判断します

病気を診断するために、いろいろな検査を行います。一般的には、体に負担が少ない検査から行い、疑わしければ、より詳しい検査を追加します。

同じ病気の診断を受けた人でも、検査の種類、順番が異なる場合があります。検査段階では複数の病気の候補が考えられ、その中でも疑いが強い部分の検査を行い、病気を絞っていくからです。

新しい機器や検査法が開発され、診断に役立っています。しかし、これらも万能ではなく、体の部位によっては、適さない検査があります。また、検査結果の精密さ・正確さの程度にばらつきがみられる場合もあります。経過をみなければわからない、発見されなかったとしても悪影響を及ぼすことのない微小な異常が見つかる場合もあります。

治療に関する情報

インターネット



国立がん研究センター がん対策情報センター
がん情報サービス
『それぞれのがんの解説』に関する情報

<http://ganjoho.jp/public/cancer/index.html>

がんの部位別に、症状、検査、治療などの情報があります。

代替療法

<http://cancerinfo.tri-kobe.org/>

このサイトの PDQ® 日本語版は、米国国立がん研究所 (NCI) が配信するがん情報サービスを邦訳したものです。
より詳しい情報は『専門家向け』から得られます。

1 つの検査結果だけでは判断が難しく、医師は複数の検査結果を総合的にみて、診断します。複数の検査からいろいろな情報が集まれば、より確信をもって、患者さんに説明できます。検査途中の段階では、どうい可能性があるのか、言い換えると医師の頭の中ではいく通りの状況が考えられているのか、そして、明らかにするためにどのような検査が必要なのかについて、説明を受けると良いと思います。



結果と予測

治療をする前から先の結果を予測することはできません。手術では、実際に臓器の状態を見たり、術中に検査を行った結果によって、手術方針が確定したりします。抗がん剤治療の場合も、副作用が起こる確率について、集団でおよそ何%と言うことはできても、どの患者さんに起こるかを言い当てることはできないのです。

また、同じ病気の診断と治療を受けても、一人ひとりの体は違うので、治療の経過は異なります。

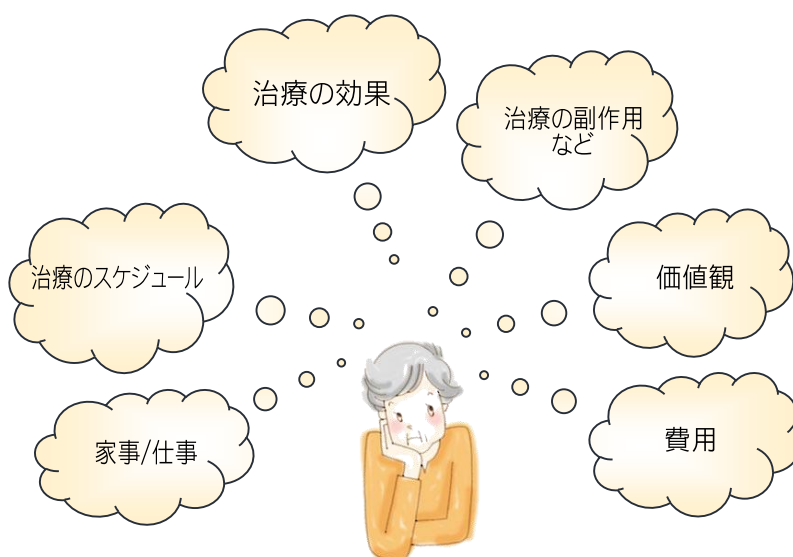
説明の内容ですが、全ての事柄について、起こりうる可能性を伝えられるだけでは、どう理解して良いかわからず、余計に不安になりかねません。どのくらいの頻度で起こると予想されるのか、起こった場合にも程度の差があること、それぞれの予防や対処などが加わることで、患者さんが治療選択をする上で役に立つ情報になります。

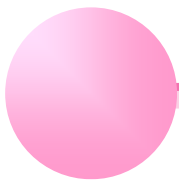
事前に、起こりうる可能性の説明があれば、実際起こった場合の受け止めが違ったと思われるのは当然です。医師の説明が足りないと思われたら、患者さんやご家族から質問をしてください。疑問や納得できないことをそのままにしておくのは、よくありません。

説明を求めるとき

医師に説明を求める時には、具体的で簡潔にまとめて質問しましょう。また、本で得た情報などについて担当医の意見を聞いてみたい時には、口頭で伝えるより、その本を提示するとよく伝わります。

同じ問答が続いてしまう時は、ご家族や病院スタッフなどに、ご自分の気持ちや聞きたいことを伝えておいた上で、同席してもらい、質問を補足してもらうと良いと思います。





5-2-1-4

同席する肉親がいなくて困った

- 全てひとりの判断でがんに立ち向かわなければならない状況だったので、相談できる人や支えてくれる人がいないことがつらかった。

あなたは一人ではありません

たとえ、ご家族や親戚がいなくても、あなたは一人ではありません。これまでにご家族と同じくらいこころを許せた大切な友人や、相談にのってくれた人、困っていた時に助けてくれた人がいたと思います。病気になったからといって、そういう関係がなくなるということはありません。

もし、信頼できる友人がいれば、話してみてもいいでしょう。

相談できる人や場所を見つける

不安にとらわれた時やつらい時に、誰かに自分の気持ちを聴いてもらうというのは大切なことだと思います。気持ちを口に出して聴いてもらうだけで、少しこころが楽になります。

また、がんという病気は体だけではなく、いろいろな不安や経済的な問題など、様々な側面からこれまで築いてきた生活を脅かす時もあると思います。そういう時は、一人より二人、二人より三人の方が良い知恵も浮かぶこともあり、支えにもなってくれます。

一人で抱え込まず、自分から働きかけることも大切です。

病院内にも、いつでも相談できる人がいると心強いと思います。おかけの病院に『医療相談室』があるかもしれませんので、一度聞いてみると良いでしょう。

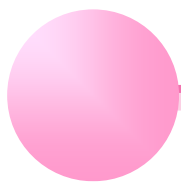
また、各都道府県のがん診療連携拠点病院（厚生労働省が指定）の相談支援センター（よろず相談）にも相談窓口があります。

相談支援センターに関する情報

国立がん研究センター がん対策情報センター
がん情報サービス
『がん相談支援センター』に関する情報

<http://hospdb.ganjoho.jp/kyotendb.nsf/xpConsultantSearchTop.xs>

がん診療連携拠点病院の相談支援センターを病院名や地図などから探すことができます。相談支援センターの名前や問い合わせ先、対応時間などを確認でき、各施設の相談支援センター名を押すと、さらに詳しい情報を確認することができます。



5-2-1-5

インフォームドコンセントの仕方や配慮に関する不満

- 再手術前に病理の結果を聞いたが、ショックであまり覚えていない。再び医師に聞いても教えてもらえず、意思が伝わらなく不信を抱いた。
- 明確な事実を知りたかったのに、「将来悪くなる可能性のある細胞が見つかったので、全部取りましょう」という表現をされ、私には望ましくない表現だったように思う。
- 具体的に手術の切除範囲や治療法の説明を受けたのが手術前夜で、こういった状況なのかわからず不安だった。
- 病理結果の読み取り方が分からず、悪性度に関して悩んだ。診療で説明の時間が短時間しかとれないならそのフォローとして患者用資料室や説明書の用意などが必要だと感じた。

わからないことや不安なことは医師に確認する

わからないことや不安なことがある時には、担当医とよく話をしてみましょう。

あなたが既にがんの治療を受けている時には、担当医と話をします。がんかどうかまだはっきりせず、検査を受けている段階であれば、検査の結果を説明してくれた医師に質問してみましょう。

診察室では、わからないことや不安なことがある時には、医師が説明するのを待つのではなく、自分の方から積極的に質問するように心がけてください。

患者さんの質問に答えることは、医師の大切な仕事の一つです。遠慮しないで、不明な点や疑問点については、その都度きちんと確認するようにしましょう。

あきらめずに、気持ちを伝え確認してみる

病気や治療の説明を受ける時、検査の結果を聞く時などは緊張もしていますし、不安も強いと思います。動揺もあり、担当医が話した内容を100%理解するというのは難しいものです。

担当医が教えてくれないとしても、それをそのままにして、不信感を抱きながら診療を受け続けるのは、あなた自身にとっても、担当医にとっても良くありません。なぜ知りたいのか、知らないままにいることでどういう気持ちなのか、これから先のことを考え、聞きたいことを担当医に話してみてもはどうでしょうか。一人では言い出しにくいようであれば、ご家族と一緒に話してみても良いでしょう。

もしかすると、教えないのは、あなたの気持ちをおしはかった上での担当医の配慮なのかもしれません。

しかし、あなた自身の実際の希望が“知りたい”ということであれば納得できるように行動を起こしていくことが大切です。

検査結果の解釈は医師に確認

病気の診断、治療に検査は不可欠です。病気に関する本には、主な検査も書いてあることがほとんどです。検査項目と正常範囲をまとめた本なども出版されています。

しかし、検査に用いられる言葉や数字のもつ意味は難解ですし、病理結果は、専門用語で書かれています。

血液検査などは、それぞれの項目に正常範囲が設けられていますが、1つの検査で正常範囲を超えているから必ず「異常」ということではありません。医師は、一人ひとりの体質を考慮し、検査値がどう動いていくかを見ます。また、1つの検査だけでなく、関連した検査結果を総合して判断します。

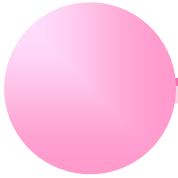
検査結果が知りたいというのは、検査結果から自分の体の状態はどのように考えられるのか、という疑問がもとにあると思います。患者さんの体に関することは、担当医が最もよく知っています。本などに書かれている一般的内容を患者さんの状況に合わせて具体的に説明できるのは、担当医です。検査結果の最終的な解釈については、必ず医師に確認してください。

インフォームドコンセントとは？



直訳すると「説明と同意」という意味です。医師は、病気や治療について患者さんにわかりやすい言葉を使って十分に説明し、患者さんは疑問を解消し、納得して診療に同意することを言います。





5-3-1-1

医師により診断・治療方針が異なる

- 「99%大丈夫」と言われたが、その後、他の病院で「即入院して手術した方がいい」と言われ、驚きと不安があった。
- 最初の病院で組織検査をしたところ「がん細胞はない」と言われた。他の専門病院で検査をしたところ「がん」と診断された。ショックでどちらの先生を信頼してよいか悩み、しばらくは放心状態だった。
- 病院や医者によって治療の内容等が違いため、どこの病院で手術や治療を受けようか選択に悩んだ。
- セカンドオピニオンを受けたが、両方の病院の意見をどう処理すればいいのか難しかった。患者の選択は重い決断で、神様にすがりたいような感じだった。

その根拠や理由を合わせて聞く

情報がたくさんあるほど、医師は診断をつけやすくなります。検査途中は、いろいろな可能性を考えて情報を集めている段階です。ある病気の可能性が高いと考えていても、検査をする中で、くつがえることもあります。また、検査は、毎回同じ結果とは限りません。

医師の診断が違う場合、患者さんには混乱が生じるかもしれません。

現在かかっている担当医が、患者さんのこれまでの検査結果や受けた説明を把握していれば、担当医はどの点に関して、どういう理由から、以前の診断と異なるということを患者さんに説明できると思います。多くの場合、結果だけを聞くより、その根拠や理由を合わせて聞いた方が理解できます。

患者さんができることは、担当医が多くの情報をもとに診断できるように、ご自身の体の情報をきちんと伝えることです。セカンドオピニオンを受ける時だけでなく、転院する時も、これまでの経過がわかる紹介状（診療情報提供書）、検査結果を持っていくようにしてください。

紹介状（診療情報提供書）とは？



医師が他の医師へ患者さんを紹介する場合に発行する書類です。

患者さんの病気の状況やその時点までの治療経過などが書かれています。

治療を決めるときに考えること

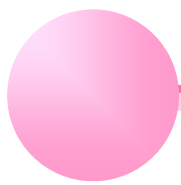
治療の選択を検討する時には、その治療の利点（その人自身にとって、あるいは病気をコントロールする点で良いこと）だけではなく、欠点（副作用のことや危険性のこと、起こりうる合併症のことなども含めて、その人自身にとって良くないこと）も含めて考える必要があります。

この利点・欠点というのは、“自分自身にとって”ということなので、たとえば『生活の質（QOL）』という面を考えた時は、その人自身がどういう生活を望んでいるかによって、総合的な利点・欠点が変わることもあります。

また治療は、どんながんの、どんな時期でも効果があるわけではありません。利点が多い治療でも、その人のがんには適応にならない場合もあります。

医師は、がんの進み具合や臓器の状態、また患者さんの体全体の状況などを十分考慮した上で、可能な治療法を説明します。

大事ななのは、いろいろな側面から考え、検討して、実際に治療を受ける自分自身で決めることだと思います。



5-3-1-3

セカンドオピニオンを受けるべきか

- セカンドオピニオンについて悩んだ。
- 本当にがんなのかと思って、他の病院に再検査してもらった方が良いか悩んだ。
- 診断が信じられず、何人もの先生に診ていただきたと思った。
- 他の病院にも行って、診てもらった方がよいのかどうか心配だった。

セカンドオピニオンはどういうものか

セカンドオピニオンというのは、直訳すると『第2の意見』で、『症状や治療法について、現在の自分の担当医以外の医師の意見を聞き参考にする』をいいます。

これは、

- 診断や治療法が自分に合っているか
確かめたい
- 他の治療法がないか知りたい

などの場合に、ご自身が納得して治療を選択し受けるために、他の医師の意見も聞いてみるという方法です。

セカンドオピニオンを受けようか迷っている時は、まず担当医の治療の説明を十分理解できているか、なぜセカンドオピニオンを受けようと思ったのか、もう一度自分自身に問いかけてみましょう。少なくとも、現段階では、あなたの病気の状況を一番よく知っているのは、現在の担当医なので、わからないことがあれば、ま

ず担当医に確認しましょう。もしかしたら、理解できていない点や疑問な点を担当医に確認することで、セカンドオピニオンを受けなくても、あなたの迷いや問題は解決するかもしれません。

現在、セカンドオピニオンを実施している病院は増えてきていますが、まだ数も限られています。また、多くの医療機関では、セカンドオピニオンは予約をとって実施していますので、場合によっては、2～3週間待たなければいけない場合もあります。このことをあらかじめ承知しておきましょう。

- ・ なぜセカンドオピニオンを受けようと思ったのか？
- ・ 担当医の治療の説明を十分に受けたか？
- ・ その説明をきちんと理解しているか？



セカンドオピニオンを受ける効果は

セカンドオピニオンを受ける効果としては、次のようなことが考えられます。

- 現在の担当医の診断や方針に関する確認ができます。
- 診断や治療の妥当性（適切性）を再確認することで、納得して治療を受けることができます。
- 現在の担当医の提示する治療法以外の治療法の情報を得ることもあります。

セカンドオピニオンを受ける際の注意

セカンドオピニオンを受ける際には、担当医に「セカンドオピニオンを受けたい」とはっきりと申し出ることと、セカンドオピニオンは病院を移るのではなく、他の医師の意見を聞くことであることをよく理解しておくことが大切です。

もし、セカンドオピニオンを受けた病院での治療法を選択しようと決心したら、その旨を現在の担当医に伝え、改めてその病院を受診するようになります。最初から病院を移るつमोरの場合、セカンドオピニオンではなく、転院として担当医に申し出ることになります。

転院は“言い出しにくいから内緒で”と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、何も情報がないまま他の病院に移ると、また一から検査をしなければならず、時間もお金もかかります。もし過去にがんの治療をされたことがある場合、その情報がないというのは、患者さんの病気を把握するための大事な手がかりを失うこととなります。

一般的なセカンドオピニオンの流れ

他の意見も聞いて、参考にしたい



担当医と相談



- セカンドオピニオンを受けたい気持ちを伝える
- どの病院でセカンドオピニオンを受けるのが良いか



セカンドオピニオンを受ける病院に連絡

- 事前に準備するものを確認
(セカンドオピニオンでは、これまでの経過や行われた検査の資料等にもとづいて説明を行います。)
- 予約が必要であれば予約する



担当医に書類や検査資料を準備してもらう

- 紹介状（診療情報提供書）、検査結果資料、病理標本 など



セカンドオピニオンを受ける



担当医に報告



- 担当医にセカンドオピニオンの結果を報告する
- 転院を希望する場合は申し出る

納得できない点を確認、検討してみる

納得できない点があれば、まず担当医に伝え、確認しても良いでしょう。

また、どういう過程を経て（診断のための検査など）診断がされるのかをご自身で理解することも大切です。もし、インターネットを使えるようであれば、国立がん研究センターがん対策情報センター『がん情報サービス』のホームページを見てみましょう。

問題を整理したり、相談してみる

セカンドオピニオンを受けようか迷っているのは、あなたの中に、このまま治療を決めることへの不安や疑問があるからかもしれません。担当医にセカンドオピニオンを申し出る前に、どこかに相談したいのであれば、外来の看護師、かかっている医療機関の相談窓口、または、がん診療連携拠点病院の相談支援センター（よろず相談）に相談することができます。人に話すことで、自分の頭の中を再整理することもできますし、セカンドオピニオンを受けるとしたら、どこで受けられるかという情報などを得られるでしょう。

治療に関する情報

インターネット



国立がん研究センター がん対策情報センター
がん情報サービス
『それぞれのがんの解説』に関する情報

<http://ganjoho.jp/public/cancer/index.html>

がんの部位別に、症状、検査、治療などの情報があります。

がん情報サイト

<http://cancerinfo.tri-kobe.org/>

このサイトの PDQ[®]日本語版は、米国国立がん研究所（NCI）が配信するがん情報サービスを邦訳したものです。
より詳しい情報は『専門家向け』から得られます。

相談支援センターに関する情報

インターネット



国立がん研究センター がん対策情報センター
がん情報サービス
『がん相談支援センター』に関する情報

<http://hospdb.ganjoho.jp/kyotendb.nsf/xpConsultantSearchTop.x>

がん診療連携拠点病院の相談支援センターを病院名や地図などから探すことができます。相談支援センターの名前や問い合わせ先、対応時間などを確認でき、各施設の相談支援センター名を押すと、さらに詳しい情報を確認することができます。

セカンドオピニオンに関する情報

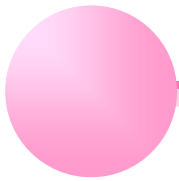
インターネット



セカンドオピニオン・ネットワーク

<http://www.2-opinion.net/>

小冊子「（がんの）セカンドオピニオンを上手にとるコツ」をダウンロードしたり、『セカンドオピニオン協力医リスト』の閲覧ができます。



5-3-1-4

セカンドオピニオンを求めることによる 主治医との関係の変化

- セカンドオピニオンを受けることにしたが、その間医師との人間関係で悩んだ。
- セカンドオピニオンを希望したが、そこに至るまでの自分自身の葛藤や別の病院へ行くことに
対する担当医の抵抗にあい、非常にエネルギーを使った。
- 医師が有名医であったため、セカンドオピニオンの希望や資料の持ち出しなどが言えなかった。

納得して治療を受けるためのしくみ

セカンドオピニオンは、患者さんが納得して治療を受けるためのしくみであり、患者さんの権利として一般に認められています。がんという病気に向き合うことは、人生の大切な決断です。そのために、納得できるまで情報を集めたいと思う気持ちは、ごく自然なものです。

患者さんやご家族は、セカンドオピニオンを受けることについて、どうしても担当医に遠慮してしまいがちです。しかし、担当医は多くの患者さん、ご家族と接していて、セカンドオピニオンの依頼も日常的に受けているのです。率直に相談すれば、担当医が気持ちを損ねることは実際にはほとんどないと思います。

逆に、納得できない気持ちを抱えたまま治療を受けることは、あなたにとっても、担当医にとっても好ましくないでしょう。

担当医に相談しながら

セカンドオピニオンを受ける際に大切なことは、担当医に相談しながら手続きを進めていくことです。

セカンドオピニオンを受ける前に、きちんと担当医に相談し、紹介状（診療情報提供書）と資料を準備してもらいましょう。セカンドオピニオンを、あなた自身の病状に合った適切なものにするためには、担当医からの情報提供が不可欠です。

セカンドオピニオンを受けた後は、担当医に紹介先で聞いた話を報告します。その際、書類の作成や資料の貸し出しについて、感謝の言葉を伝えましょう。

このようなやりとりがきちんとできれば、セカンドオピニオンを受けることで、あなたと担当医の信頼関係は損なわれることはなく、むしろ、かえって深まることもあるかもしれません。

5-3-1-5

セカンドオピニオンの医師が主治医に気を遣った診断をした

- セカンドオピニオンを受けたが、「今の方針通りでよいと思います」としか言われなかった。紹介してきた主治医に気を遣って診断を下したのではないかと悩んだ。

安心して、担当医に

セカンドオピニオン医師は、受け持ちの患者さん、それ以外の患者さんと分けへだてなく、科学的な根拠に基づいて、患者さんにとって最善と思われる治療を提示します。相手の担当医にとって都合のよい意見を伝えるわけではありません。

セカンドオピニオンを受け、結果的には担当医と同じ診断、治療方針の提案だった、ということは、よくあることです。ただ、だからといってセカンドオピニオンを受けたことが無駄になるわけではありません。

セカンドオピニオンの結果が、今の方針と同じであった時には、今まで以上に安心して、担当医のもとに戻ることができると思います。患者さんやご家族からは、結論は同じであっても、別の先生の説明を聞いて、治療に納得できた、気持ちの整理ができたという声を聞きます。

